

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月27日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012年度

課題番号：22401035

研究課題名（和文） 遺跡構造に関する総合的基礎調査法の研究：ベトナムの大規模長期利用遺跡を事例として

研究課題名（英文） Study of the comprehensive basic research method on the site structure: case study from large-scale sites with long occupation period in Vietnam

研究代表者

西村 昌也 (NISHIMURA Masanari)

金沢大学・国際文化資源学研究センター・客員研究員

研究者番号：60469236

研究成果の概要（和文）：

大規模面積をもち、かつ各時代に亘って利用されてきた遺跡を構造的に理解することは、大規模発掘調査を除けば非常に困難である。本研究は、ベトナムにおける城郭遺跡や大型居住遺跡を対象に、小規模な発掘調査と地形の観察や測量調査、さらに地図資料の分析などから、遺跡の構造的な理解をめざす研究を行ったものである。これまで構造的な理解が未提出であった各遺跡に対して、地図資料分析と微地形観察調査と GPS 測量を組み合わせた胡朝城遺跡の構造、試掘調査と微地形観察と測量調査を組み合わせたホアチャウ城の形成過程と時期別の構造、衛星写真と地形踏査によるチャンパの各城郭遺跡の構造などの全く新しい知見を提出し、後続研究が追従できるよう。その方法論を説明しつつ研究成果を出版した。

研究成果の概要（英文）：

In case of the large-scale archaeological site, it is rather difficult to understand its structure in time and space, except the large-scale excavation. This research project was aimed to study the structure of the large-scale sites in Vietnam such as fort, citadel and large scale habitation sites in time and space without large-scale excavation. The study is conducted by multi-methodology combining together with test excavation, observation of micro-topography, land-survey and analysis of map and satellite photo. The study provided new recognitions on the site structure like Ho Dynasty Citadel, Hoa Chau Fort site, fort sites of the Champa Kingdom. Also the research results was published as a final report with methodological explanation for the research followers' convenience.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,700,000円	810,000円	3,510,000円
2011年度	1,600,000円	480,000円	2,080,000円
2012年度	1,800,000円	540,000円	2,340,000円
年度			
年度			
総計	6,100,000円	1,830,000円	7,930,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：大規模遺跡城、城郭、ベトナム、長期利用、測量、遺跡構造、試掘調査、歴史地理

## 1. 研究開始当初の背景

近年、東南アジアでは後期新石器時代以降から歴史時代にかけて、長期間居住(500-1000年単位)や利用が行われる大型遺跡が多く出現する。こうした大型遺跡には文化層の厚い重層マウンド遺跡、低湿地における大型集落遺跡、丘陵地の地形改変を行って信仰建築を建てる建築遺跡群、上類をもつ城郭遺跡などが挙げられる。

ただし、その多くは開発に伴う緊急調査や遺跡の公園化などの遺跡活用を目的とした発掘調査である。さらに多くの場合、遺跡の全体構造把握を正確に行わないまま、あるいは行ったとしても、それを可視化したデータを十分に提供せずに調査研究を終える場合も多い。これは考古学調査が遺跡研究ではなく、遺跡が内包する遺物や関連遺構の検出に主たる目的を置くことが多いことに起因する。

こうした状況は、建築遺跡などの大規模な調査プロジェクト以外の東南アジアの遺跡で、考古学調査を行う外国人研究者にも当てはまる場合が多い。その理由は簡単で、費用や時間的制限が付されている場合が多いこと、遺跡の全体構造への関心が薄いこと、遺跡構造把握のための方法論が適正に開発・整理されていないからである。

特に上記の長期間居住・利用された大型遺跡を時間軸に沿って空間構造として把握できないことは、国家出現前後期以後の社会の構造的変化などの理解を困難にしている。

これに対し、近年、遺跡の測量技術やそのデータ処理法、さらに鳥瞰(衛星)写真などの研究利用に関しては、日本を中心に長足の進歩がみられるようになった。特に、情報処理技術の発展で、測量データの多次元処理、さらには情報付加処理技術、さらには多角的な情報共有化の手段は、簡易な装備と少人数での大規模遺跡調査・研究を可能としている。また、そのような精緻なデータが、日本では非専門家の人間にも閲覧・利用を容易にしたおかげで、同種の情報を活用した遺跡の公共活用なども盛んとなっている。しかし、そうした研究法や成果は、まだ東南アジアで広く認識・実行されていない。また、地理学的研究、古環境研究のデータなども、発掘調査や測量調査と有機的に結びつけて、議論を展開したり、遺跡の構造把握のために活用することは活発ではない。

以上の状況により、東南アジアの多くの遺跡では、遺跡の基礎構造に関する情報が研究者間でさえ共有されず、複数回の調査が進んだり、そうした基礎情報が欠如したまま、遺跡の活用事業などが進んでおり、悪循環が起きている。

## 2. 研究の目的

以上の悪循環を解決するには、最新の遺跡測量システムを東南アジアに導入して、広範に活用できる状況をつくり、モデルとなるような基礎研究法を提出して、その有効性を幅広く認知してもらう必要がある。

最新の測量技術と測量情報ソフトと遺跡周囲の衛星写真や航空写真を組み合わせて、遺跡の地形測量による2次元情報化と試掘などの小規模発掘調査をもとに遺跡の3次元情報化を、それぞれの性質の異なる遺跡で行う。

こうした作業を通じて、遺跡の特性に応じた、測量調査や試掘的小規模調査の具体的方法論を、ベトナム人考古学者がこれまでフィールド調査で築き上げてきた体験的遺跡構造に関する認識と付きあわせて議論することが可能となり、そこから、よりよい測量方法論と小規模調査の組み合わせ方を論じることができる。また、試掘調査に関しても、単に文化層の厚みやその時期を同定するのではなく、地形分析や花粉分析などと組み合わせて古環境データとの相関を論じる方法論を確立する。

また、このような作業をタイプの異なる複数の遺跡で行い、これまでの他遺跡との既存調査結果と総合するにより、地形環境と遺跡立地の相関関係や遺跡形成過程における地形・地理環境要素の相関性に対して、その法則的な見通しが立てられるようになると考えられ、実地調査を行う以前の段階での予測議論というものが行えるようになる。

そして、これら一連の研究作業を、遺跡現場や室内整理での作業としては少人数で行えるような効率的かつ簡易な方法論に還元する。この作業は、究極には遺跡研究の基礎的方法論を整理することになり、国や地域を越えた、一つの現代考古学の基本研究法としての提示が可能となる。

## 3. 研究の方法

ベトナムでは、先史時代末から大規模な居住遺跡(10000㎡以上)が出現し、歴史時代には城郭や建築群遺跡、生産遺跡(窯址や精錬遺跡)などが出現する。特に今回は、100haを越えるものも含まれ、分布面積が最大クラスとなる城郭・都城遺跡の各週応用研究を集中し、その他、建築基壇遺跡での研究も試みた。こうした大規模遺跡の代表例を対象とし、地形測量と複数地点の小規模発掘調査、さらに古環境・古地形研究を組み合わせた総合調査を行う。また、地形・地理研究の応用や古環境研究との組み合わせにより、遺跡構造に関する総合的認識が可能となるような調査システムを構築するようにはかった。

最終的には、それぞれの遺跡の性格や入手できる地図資料、さらには研究作業を投資できる規模や時間を鑑み、調査法を選択し、可変的な総合調査を行った。

## 4. 研究成果

1) メコン河平野のゴータップ (Go Thap) 遺跡では、GPS 測量機による基準杭設定を行い、遺跡分布範囲とさらには、遺跡中心部に位置し、発掘が行われた Go Minh Su 地点の発掘区の再精査を行った。5世紀前後を中心として最低でも4時期の基壇形成期があることを明らかにした。

2) フェ市郊外ホアチャウ城遺跡(挿図参照)では、試掘調査、トータルステーション測量、地籍図と衛星写真に基づく地形踏査、古地名や現在の遺跡区の地理構造の把握などを行い、以下の事を明らかにした。

### a 初期の環境と城郭造成

ホアチャウ城域は、サーフィン文化(鉄器文化時代)あるいは、それ以前の青銅器文化時代に小規模な居住が行われていたことが判明した。しかし、各地点の地山層は泥炭層

であり、褐色砂層などは浸水域の堆積土壌であり、河川起源の堆積土壌が陸地化しているような層ではない。おそらくサーフィン文化の居住地となるような陸地は当時非常に少なく、河川や湖沼が圧倒的に卓越していた古環境であったと考えられる。

そして、チャンパ時代の土器や初期貿易陶磁器（9世紀後半）が出現する頃に、盛り土などによりホアチャウ城の造営が行われたと考えられる。これは近接するフルオンで確認されているチャンパ碑文の推定年代と大きく離れるものではない。

土盛りには褐色のシルト系土壌や砂質土が主に用いられており、周囲に多く分布していたはずの湿地域の灰色系粘質土は用いられていない。これは土塁や生活面の水はけなどを意識した意図的選択であろう。当時シルト系土壌は城郭周囲にさほど多く分布していたとは考えられず、より山側に近い地域からの盛り土の運搬も想定する必要がある。内塁では、盛り土中に大型の自然礫を一定高度で混入させている。その上下の層は単純な盛り土層であり、版築工法や、北部ベトナムに多くみられる土中の含水を抜くために礫、瓦、陶器片などを多量に混ぜた層と純質な土層を交互に積み重ねるといった独特の工法などは用いられていない。全体の面的造成に関しては、全体の広範な面積において、埋め土をして平坦面を造成し、さらに中心予定域には盛り土を加えて高みを造成する工法をとったと考えられる。

#### b 内塁とその内城生活面：

内塁の北東塁に関しては、チャンパ時代のもとは未確認に終わった。ただし、接続する北西塁、南東塁がほぼ並行して同程度の長さで残存しているところをみると、推定復元しているライン前後に土塁があったと考えたい。

内塁の内城に関しては、遺物の量からみても陳朝期や胡朝期の活発な建設活動や利用は伺えるものの、チャンパ時代に関しては、遺物量はさほど多くない。内塁内の利用は、後の時期のように活発であったとは考えにくい。

また、内城の南東端が当時水域あるいは湿地帯であったと考えられ、聞き取り調査で明らかになった内塁南西脇の湿地帯同様、内塁の周りには水濠あるいは水域があったものと考えられる。こうした水域は外塁の北端塁と北西中央塁の袂入部でも確認されており、当城域が水城的機能を持っていたことを伺わせる。

#### c 東北平坦域

内塁に北接する平坦域に位置する試掘地点などでは、下層部でチャンパ時代の盛り土層や遺物が確認されているので、広大な範囲の高みがチャンパ時代に盛り土により造成された可能性が高い。そしてこれら各地点の試掘では、内塁内に比べて遺物が多いので居住域として機能した可能性が高い。

この東北平坦域は、現在でも微高地として明らかに認識できるものである。もちろんこの形状全域がチャンパ時代の造成を反映しているとは言明しないが、その可能性は充分にあると考える。

#### d 南西平坦域

内塁の南西に広がる方形の平坦域のも、現在微高地として認識可能な区域である。地点

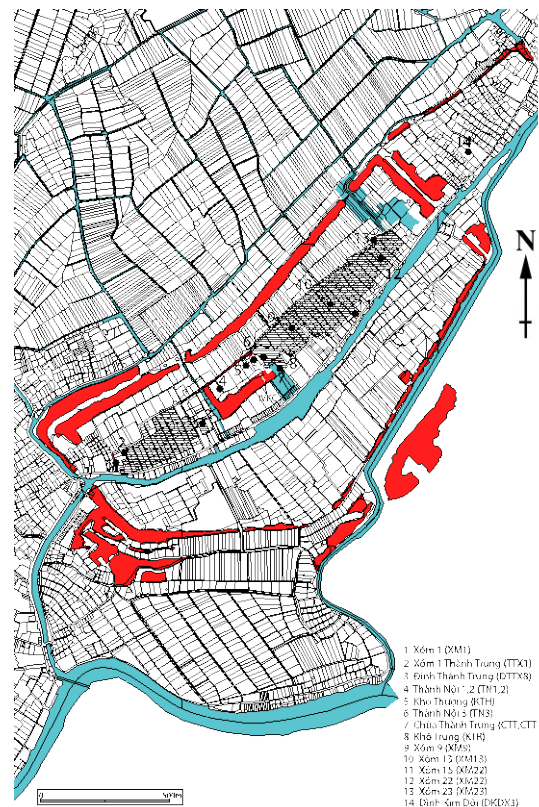


図 ホアチャウ城プラン

ではチャンパ時代の造成の可能性があり、東北平坦域同様に面的にも広く、同程度の標高をもつ高みは、造成以外に考えられない。チャンパ・陳朝両時期に盛り土造成を行った結果と考えた方がいいであろう。

#### e 外塁と北塁

コーナー部などを中心に二重、三重に土塁が造営されていることも大きな構造的特徴である。今のところ同様の構造を持つ例は、ベトナムにおいて寡聞にして知らない。また、外塁でも前述の大型自然礫などが各所で露頭していることを確認できるので、内塁と外塁は同じ工法で、おそらく同時期に造成されたものと考えてよい。

#### f ホアチャウ城の沿革

第1期のホアチャウ城は、初期貿易陶磁器の出現する時代（9世紀半ば以降あるいは10世紀）から陳朝期の大越の遺物が出現するまで活発に利用されている。焼土や炭化材を多く含む層なども確認されているので、戦争などによる侵略・破壊を受けた可能性が高い。

この時期の内塁周囲には、範囲不確定ながらもまだ水域が存在している。ポー川から城郭域を抜ける Thành Trung 川も人工運河である可能性が高い。また本紀要論文“ホアチャウ城域の地名集成：地籍情報を中心に”にあるように、北塁の北西塁外側から外塁の北端塁の外側にかけて、下港、上港という地名が残っており、該当域がかつて船着き場であったことが推定される。この船着き場がいつの時代存在したかということは皆目検討がつかないが、陳朝あるいはその後の時代のことだとしても、当地域の自然他遺跡状況から考えて、それ以前のチャンパ時代においても同様な古環境であったと推定される。また、北

塁と外塁間の水濠、外塁の北端塁と北西塁の袂入部をから外塁内にあった水域なども、もともとは上述の水域や運河側と接続していたと思われる。

従って、少なくともチャンパ時代においては、当城郭は水城的な機能を果たしていたと推定する。現在のホアチャウ城景観からみると、これはかなり異なる景観だと思われる。

第2期の陳朝期の14世紀初頭あるいは半ばにおいて、再び大造成が行われている。内塁内、さらに内塁に東接する北東平坦域も、盛り土により居住面を高くしている。

筆者らの踏査では、タインチュン運河から南城で、外塁より内側の水田地帯では、陳朝期の瓦が採集できるところがあるが、その採集地点の包含層下は低湿地土壌である。この水田地帯が現在のように水田地帯として利用できるようになったのは陳朝期以降のことなのかもしれない。

さらに、15世紀初頭（胡朝期）になると、再び城郭内外で造成が頻繁に行われており、盛り土による整地と建築活動が行われている。この頃までには、内塁周囲の水域が消滅していると思われる。また、胡朝期のみならず、15世紀半ば（黎朝盛期）にも建築活動が認められる。この15世紀の動きは、『大越史記全書』の当地域に関する記述からも納得できるものである。

そして、16世紀半ば頃には新たな土塁造成も確認される。これは阮潢の順化入府に連動している現象なのかもしれない。ホアチャウ城を城郭として利用する現象は16世紀まで続いた可能性が高い。

その後、現集落に直接繋がるような居住活動が活発になるのは17-18世紀以降のことと判断され、各集落の 주도に面したところに祠堂などが建てられ、現在のような集落光景になるのは18世紀以降のことであろう。

#### f 他チャンパ城郭との比較

少なくとも類似したプランをもつチャンパ城郭はまだ確認できない。また、外塁のコーナー部に複重の土塁を配置するプランも同様に他遺跡例にはみられないものである。さらに、行論で言及したような低湿地あるいは水域の多いところに築く水城的性格も他遺跡では確認できていない。従って、ホアチャウ城の独特の性格が浮かび上がるわけだが、長方形プランを基本形とする内塁（あるいは内城）と外塁をもつ城郭に定義を拡げるなら、紀元2世紀に造営されたチャーキウ城、造営時期は不明であるが紀元1000年紀半ばの遺物が表採されているビンディン省のアンタイン（An Thanh）城などが類似例として挙げることができる。その一方で、『水経注』36巻・温水に記載され区粟城と考えられる、フエ市西郊外のロイ（Lôi）城など、紀元1000年紀半ばの城郭プランとの形態差も見るができる。

### 3) チャンパ城郭・都城遺跡の比較研究

中部ベトナムのチャンパ時代の都城、城郭遺跡を衛星写真分析と実地踏査を組み合わせ、その構造比較を行った。

#### a. 立地

ロイ城（フエ）、チャーキウ城（クアンナム省）、ホー城（フーイエン省）などは、共に河川が平野部に流れ出す最初の地域に立地している。これは平野部の支配と、平野部より上流の山間域への影響力維持両方を狙

っていたと考える。かつて Trần Quốc Vương は、チャンパの政体が、各河川体系に沿って、上流に宗教中心地、中流に政治中心地、河口に商業港が位置するという構造を見だし、空間モデルを提出した。上述の城郭遺跡が、そのままこのモデルに当てはまるかどうかは、それぞれの水系での遺跡形成期を明らかにする必要があるが、参考になる考えである。

#### b. 平面プラン

チャーキウ、ホアチャウ（フエ）、アンタイン城（東城：ビンディン省）は共に川に沿う方向で横長長方形のプランをもつ。その一方で、ロイ城とホー城、さらにチャーバン城（ビンディン省）は正方形あるいは、それに近い形が城郭中心部の形状となっている。また、チャーキウ、ホアチャウ、アンタイン（東城）はともに、その中心域（内城や居住域）が、城郭の中心か、中心域北側に設定されている構造である。アンタイン（西城）の場合も、これらと同じ構造を有していた可能性もあろう。一方でホー城の場合は、城郭中心域より南側に居住域が確認できる。これは、城郭に接するように流れる河川近くに居住域や内城が設けられていることを示している。この共通性は、チャンパ都城の特徴として指摘できるようだ。

#### c. 土塁外縁部の張り出しや複重土塁構造

チャーキウ城の土塁コーナー部、ロイ城のコーナー部、ホー城の各土塁外縁には、張り出し部が造成されている。これは東アジア考古学が呼ぶところの”馬面”であり、城郭防衛機能の一つであろう。また、ホアチャウ城の場合は、外塁のコーナー部に複重土塁を造成しており、他に類例をみないユニークな構造が浮かび上がってくる。さらにチャーバン城の場合は、非常に大規模な張り出し部の基壇や土塁による張り出し部を造成しており、他のチャンパ城郭に比べ、格段に高い防衛機能を狙ったことが理解できる。

#### d 城郭の年代、都城候補の欠如、美術様式とのズレ

城郭が造営され、実質的な居住などを伴って機能した年代を、これまでの研究などに基づいて作業仮説的として設定し、派生する今後の研究課題を提出する。『水経注』の記述からロイ城を5-6世紀前後、考古資料からホアチャウ城を9-12世紀、チャーキウ城を2-4世紀、アンタイン城を6世紀頃から15世紀、チャーバン城を14-15世紀、ホー城を3-4世紀と考えた場合、林邑と呼ばれる初期チャンパ国家時代においてはチャーキウ城、ホー城、そして、同時期の瓦当などが調査されているコルイ城（クアンガイ省）が、都城的存在としての候補となる。また5-8世紀の期間においては、ロイ城とアンタイン城以外の城郭候補がなく、この時期のチャンパ国家中心の一つが確実に位置したクアンナム省トゥーボン川流域には、後続する9-10世紀も含めて該当する城郭遺跡が存在しないことになる。

これは奇妙なことであり、チャーキウに実質的な該当時期の居住層が見られないことに起因している。この場合、トゥーボン川流域政治権力中心がなかったと考えられるのではなく、チャーキウ城の西南に位置する、同じくズイスエン県の大規模複合遺跡であるチエムソン（Chiêm Sơn）遺跡群を、同時期の政治的拠点中心に想定すべきと考える。その場合、土塁などの強固な囲壁をもたない非

城郭遺跡が都城的存在として機能した可能性が高くなり、チャンパ国家の権力などの性質を考える上で興味深い歴史現象となる。

また、チャーキウ城やホー城の場合、居住文化層が確認される時期より後の時期の美術様式の石彫類が、丘や山などでしばしば出土・確認されている。これは都城あるいは城郭としての機能を果たさなくなった後も、宗教的機能などは維持され、一部地域が後代まで利用され続けたことを示すのではないだろうか？政治的に中心であった場所が、その機能喪失後に宗教的拠り所として存続することは決して珍しいことではあるまい。

さらに14-15世紀の城郭としては、ビンディン省のチャーバン城とアンタイン城しか無く、当然規模からして、チャーバン城が都城としてふさわしい存在であることが理解できる。推論を重ねるなら、この頃ようやくチャンパは各地域での小国家連衡状態を脱し、より統合された政体に進化していたと考えることも可能となってくる。チャーバン城の規模や多方向に大きく張り出した土塁構造も他に見られないもので、この仮説的理解にふさわしいと考える。

#### 4) コーロア城

GPS 測量機による城郭の造営軸線に関する分析を行った。コーロア城は、中国を除くと、今のところ東アジア・東南アジアにおいて、西暦6世紀以前に真北方位の施設を建設したことを確認できる唯一の事例である、と評価できる。また中国においても、真北方位の施設を整備した場合は、ほぼ都城とその周辺地区あるいは都城に準じる都市に限られていたことは、コーロア城の評価において特に重視すべき点である。

#### 5) 胡朝城遺跡

GPS 測量機による遺跡の造営軸線の分析、地籍図を応用して、微地形観察による内城内の構造復元を行った。

##### a. 胡朝城の造営報復元

頓山山頂から象山山頂を視認して、そのライン上に中軸線を設定する。平野部の北寄りの場所に皇城域の北門中心点・南門中心点を中軸線上に設定し、これらの点と中軸線を基準として皇城域と中軸街路を作る。

皇城域の南に中軸街路にそった方形区画を設定し、頓山の山麓に天地壇・付属施設群を設置し、さらに河川・丘陵を城壁で結んで羅城を形成する。そして、皇城域・方形区画・羅城内に諸施設を整えたと考えられる。

##### b. 胡朝城内城（皇城）域の構造分析（挿図参照）

皇城域の内内外両域で、現存の地割がかなり胡朝時代の都城の建築や土地区画を読み取ることができる。現存地名の収集と併せて、現存地形の分析をより詳細に行う必要がある。そして、皇城内においては、十字状に走る主道とその交点北部に造成された中心域が、禁城区の候補になり得る。

皇城内は、日本や中国の都城にみられる方眼状の条坊的地割は無かったのではないかと推察されるが、西半分域を中心に南北に長く、ベルト状に大きく区域分割する方法が主でなかったかと想像される。また、皇城内の水域の多さが目立つ。南門から北上する南主道の両脇は、中心域まで続く壁を伴う構造であった可能性が高い。

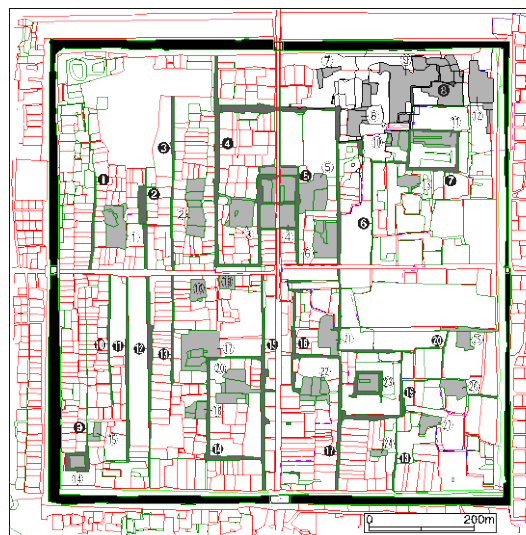


図 胡朝城皇城域平面プラン

東西南北の主道を中心に、皇城域内を分割する構想は、胡朝期の都城の一つの特徴であり、より早い例は明の中都などにも存在する。また、水濠を皇城域に廻らす構造も同様である。

南北軸から大きく軸線が偏る現象は同時期前後の中国の都城例では確認できず、胡朝期以降のタインホア以南の都城の大きな特徴であろう。ただし、中国南部を中心とする諸城郭都市には軸線が大きく偏るものもあり、これらと設計思想が共通する可能性はある。

5) 諸研究の副産物として、城郭遺跡などで採集される陶磁器や既発掘資料の資料化を通じて、15-16世紀の良好な無釉陶器や施釉陶器の編年資料を作成し、紀元2000年紀の無釉陶器編年の改訂版を作成することが可能となり、出版する事ができた。これにより、歴史時代遺跡の年代比定がより容易になった。

また、ホアチャウ城の研究結果は、当城郭遺跡の遺跡指定獲得作業のための基礎資料となった。胡朝城での測量研究は、世界遺産としての遺跡保護プロジェクトにおける、遺跡保護域確定作業に大きく寄与している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①西村昌也、ファン・ティン・トアン ニン  
ビン省チャンアン地区のモイ洞穴の発掘  
*Khaco co hoc* No.5/2012. 2012、62-70. (ベトナム語) (査読有)

②西村昌也、フエ都城北郊域の歴史地理学的研究、*周縁の文化交渉学*シリーズ7、フエ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点、*関西大学*、2012、15-60. (査読無)

③西村昌也、レ・ディン・フック、レ・ズイ・ソン、クエン・ヴァン・クアン 化州 (Hóa

Châu) 城の考古学調査、周縁の文化交渉学シリーズ 7、フエ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点、関西大学、2012、457-480。(査読無)

④西村昌也、ベトナム形成史における“南”からの視点：考古学・古代学からみた中部ベトナム(チャンパ)と北部地域(タインホア・ゲアン地方)の役割、周縁の文化交渉学シリーズ 6 周縁と中心で読み解く東アジアの越・韓・琉：歴史学・考古学研究からの視座、関西大学、2012、105-141 (査読無)

⑤宇野隆夫 GIS を用いた古代北陸道の復元研究、加茂遺跡詳細分布調査(第1~21調査区)発掘調査報告書、2012年、135-138.

⑥西村昌也、西野範子：ベトナムにおけるパブリック・アーケオロジーの実践：10年間の活動経験からの経験則『テキスト 文化資源学』、金沢大学国際文化資源学センター、29-39頁、2011 (査読無)

⑦宇野隆夫 東アジアの天地思想と上円下方壇、象鼻山古墳群第1~4次発掘調査の報告書、2010年、176-179.

[学会発表] (計3件)

①□西村昌也 Early bronze casting and its cultural impact of the prehistory in Northern Vietnam. 78<sup>th</sup> Annual Meeting of the Society for American Archaeology, 2013年4月6日, Hawaii Convention center. (USA)

②西村昌也フエ都城北郊域の集落形成と展開：歴史地理学的視点より、第87回東南アジア学会大会 セッション『ベトナム中・南部集落の形成と歴史的展開：フエ都城北郊域とドンタップムオイ開拓村域の比較から』6月3日、於京都文教大学(京都府)

③西村昌也ベトナム形成史における“南”からの視点：考古学・古代学からみた中部ベトナム(チャンパ)と北部地域(タインホア・ゲアン地方)の役割、周縁と中心で読み解く東アジアの越・韓・琉：歴史学・考古学研究からの視座2011年10月2日関西大学文化交渉学教育研究拠点(大阪府)

[図書] (計4件)

①西村昌也、宇野隆夫 他 大越・チャンパの都城・城郭遺跡の基礎的研究、東南アジア埋蔵文化財保護基金、2013、1-169頁.

②西村昌也 他 文化資源学研究6号 ベトナムのパブリックアーケオロジーと考古資料の社会還元、2013、1-99.

③西村昌也 ベトナムの考古・古代学 同成社、2011年、360.

④宇野隆夫ユーラシア古代都市集落の歴史空間を読む、2010、勉誠出版、201頁

[その他]

ホームページ等

世界遺産胡朝城の遺跡保護域確定プロジェクト

[http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/other/colum/colum\\_20120227.html](http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/other/colum/colum_20120227.html)

フエ科学大学歴史学部と共同してホアチャウ城域の学術シンポジウムを開催

<http://www.husc.edu.vn/khoasu/news.php?readmore=1498>

テレビ特集

ベトナム国営テレビ第4チャンネル 番組“Expert Vietnam”で、西村昌也の考古学的研究活動を紹介

2013年4月4日と4月11日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村昌也 (NISHIMURA Masanari)

金沢大学・国際文化資源学センター・客員研究員

研究者番号：60469236

(2) 研究分担者

宇野隆夫 (UNO Takao)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：70115799